慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | シャルル・ペギーとアントナン・ラヴェルニュ : De <<Jean Coste>> |
| Sub Title | Charles Péguy et Antonin Lavergne : De "Jean Coste" |
| Author | 田代, 葆(Tashiro, Shigeru) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1982 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.137(158)- 155(140) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 白井浩司教授記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0155 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# シャルル・ペギーとアントナン・ラヴェルニュ

## —— De《Jean Coste》——

田代　葆

### (I) アントナン・ラヴェルニュについて

アントナン・ラヴェルニュ (Antonin Lavergne) はモンペリエを首邑とするエロー県アニアーヌに1863年に生まれている。両親はジャック・ラヴェルニュ(父)，デルフィーヌ・ドマ（母）で，彼らはつつましい地方地主であった。1882年9月，教員免許を取得したラヴェルニュは同県ペズナス[(1)]で助教師となる。1884年同県ベズイエの高等科の助教員となり1885年5月20日には病気を理由に休職願いを当局に提出している。翌1886年，フォルテュネー＝マリー＝フランソワーズ・エトルクと結婚，同年5月に1年間の休職期間終了にともないベズイエのガボー校で助教員の任を再開，翌1887年長女デゥニーズが誕生，1888年ランド県ダックスの師範学校教員に任ぜられ，90年までに様々な資格[(2)]を職得した彼は同年，同師範学校の教授職に任命される。この年家族の事情でアミアンへの転任を希望した彼はそれを許可され，同地の教員となり，さらに '93年エヴルーの師範学校の教授となり，'94年から '95年にかけて，ラヴェルニュは小説《ジャン・コスト》を手がけるのである[(3)]。このあとローデに転任させられた[(4)]彼は作品《J・C》を出版（ないしは雑誌掲載）しようと手をつくすのだが様々な拒絶に会い[(5)]，作品脱稿後5年を経た '99年彼はその作品をラ・ソシエテ・ヌーヴェル社に送附[(6)]する。このとき，ラヴェルニュとペギーの接触が成立するのである。

シャルル・ペギーはといえば，大作「ジャンヌ・ダルク」を書きあげ

( '97年)，翌年には「マルセル，調和ある都市に関する第1の対話」を脱稿，[7] つづいて'99年の一連の政治的攻撃文の発表へと移行していた。《ラ・ルヴュ・ブランシュ》に発表したそれらの論文11編[8]はまさに《ドレフュス事件》に関する主題をあらゆる角度から執拗に追求したものである。[9] 確かに《ドレフュス事件》はこの年，見方によれば1900年12月27日の議会での《ドレフュス事件に関する大赦法》可決を前にして，1つの佳境に入っていたといえよう。即ち，軍部が死守してきた「第1の密書」がドレフュスのものではないという事実，[10] 陸軍大臣フレシネの辞職等々にともない，同年6月4日破棄院は1894年の《ドレフュス有罪判決》を破棄，軍法会議の再審を決定，この再審に強く反対してきたデュピュイ内閣は総辞職し，左翼集団はロンシャンで今までの鬱憤を晴らすかのように気勢をあげるのである。ペギーもまた，その強力なメンバーの1人であったドレフュス主義者達はゾラの告発から始まった長く苦しい闘いが勝利に向かって前進し始めたことを感じ，一方軍部，教会，保守政治家たち，いわば体制派はこれを機にその戦線縮小を余儀なくされたのである。と同特に十万余の民衆を集めた6月11日の示威行動の日付は，そのままドレフュス派内部の解体につながる。即ち，同派内部に力をもつに至った社会主義諸派——政治結社としての——とドレフュス事件そのものの中に社会主義の理想実現を模索しようとする非政治的(ポリティク)，人間開放主義的社会主義の分離である。社会主義者ペギーの立場は後者であり，その立場から彼は社会主義者の統一を期待しつつも，その教条主義に対して鋭どい警告の矢を放ちつづける。その社会主義者の統一，という夢は現実となる。1899年12月，パリで第1回社会主義者全国大会[11]が開かれたのである。がしかし，その大会に勇躍参加したペギーは[12]《新しい党派の名のもとに課せられるであろう欺瞞と新たな不正義にうんざりして退場》[13]したのであった。多くの社会主義者達はこの大会を評価した。だがペギーは政治的党派性をぎらつかせ，党理由のためには言論の自由をも奪おうとし，一丸となって選挙に勝利しようとする社会主義者達に，またその《大会》のあり方に失望する。[14] ペギーはその激しい失望と憤りを，パスカルの作品名をもじって《田舎の友の手紙》[15]と題する論

文上にぶちまける。この論文は《大会》への，（もはや今となっては）旧同士達への，（そして《神秘(ミステイク)》を忘れ《政治(ポリテイク)》にはしる社会主義党への呪詛と訣別であった。旧同士達もペギーを排斥する。即ち，ペギーがその妻の持参金約4万フランをつぎこんだジョルジュ・ベレ書店の共同経営者達5人の内の1人，リュシアン・エールはペギーに向かってこう言う。《君は我々が何年にもわたって準備しているのとは別の方角に行くのだ。君はアナーキストだよ。僕達は全力で君とは別の道を歩くよ。[16]》ペギーはそうした5人（les Cing：リュシアン・エール，レオン・ブルム，マリオ・ロック，フランソワ・シミアン，シャルル・アンドレル）と，《ソシエテ・ヌーヴェル》社とに訣別する。そんな時である。その5人組はペギーの，ある意見（希望）を無視していた。即ち，送附されたラヴェルニュの作品出版を拒んだのである。ラヴェルニュ36才，ペギー26才である。

ダニエル・アレヴィーはこう書く[17]。《「ジャン・コスト」と題され，アントナン・ラヴェルニュと記された原稿が「ソシエテ・ヌーヴェル」にあずけられていた。ペギーはその作品に注目していた。（……）ペギーはその「ジャン・コスト」が出版されないのではないかと考えてみたこともなかった。（……）しかしこの家族の（小説中のジャン一家を指す——筆者註）哀れさは彼ら（5人組を指す——筆者註）の関心をひかなかった。「ダメだよ，出版するほどのものじゃないね」とレオン・ブルムは意見を述べた。（……）結局「ジャン・コスト」は拒絶された。この拒絶はペギーを動揺させた。》ラヴェルニュはその回想記においてこう書く[18]。《ペギーはその原稿（「ジャン・コスト」のこと——筆者註）を読んでくれた。その作品は彼の気に入った。だが彼はそれを出版社に引受けさせることが出来なかった。すぐに彼は私に手紙を書いてくれ，作品は自分が所持している，そしてそれは近く出版の運びとなるであろう《カイエ》に載せるだろう，と言ってきた。当時私が生活していた遠い田舎に，簡潔で称讃のあふれたその手紙は大きな喜びをもたらしてくれた。》ラヴェルニュはローデからボーヴェに居を移す（1900年）。まさに田舎で，ラヴェルニュは政治

的党派性などもたない貧しい一教師でありつづけると同時に，遠く憧れのパリから《出版》の快諾をよこしたペギーなる人物の作ろうとしている雑誌《カイエ》の出現をひっそりと待つ。一方ペギーは党派性むき出しの社会主義党へ背を向け，旧同士達からは裏切り者めといわれつつも己の主義主張を貫くための己の雑誌《カイエ》を独力で発刊にこぎつける。《1900年1月5日，パリのカルチエ・ラタンの書店の店頭に，見なれぬ雑誌ともパンフレットともつかない小冊子がいっせいにならべられた。》[19] 1F50のこの小冊子，即ち《カイエ・ドゥ・ラ・ケンゼーヌ》である。この《カイエ》第1集第1分冊に編集人シャルル・ペギーは《田舎の友の手紙》を載せた。そして1901年の《カイエ》第2集第12分冊にペギーは約束どおりラヴェルニュの作品《J・C》を載せた。このとき，ペギーは，その《出版者の序》[20]において《この作品はブルジョワ出版業者どもにこけにされた》と書くことを忘れなかった。

## （Ⅱ） A・ラヴェルニュの《ジャン・コスト》[21]

ラヴェルニュの《J・C》は概略次のような筋をもつ。

《3人の助教員が小学校の校庭を前にして話をしている。その中の1人最年長のジャン・コストは背の高いやせた身体つきで褐色の髪，少々斜視がかった目をもつが健康で優し気な雰囲気を漂わせる青年である。[22] とりとめのない仲間内のおしゃべりの最中に一通の手紙がジャンにとどけられた。[23] マルヴァルへの転任命令書である。ジャンは喜びで胸が一杯になる。転任は昇給とひいては地位向上につながるということを，ジャンも，またその仲間達も知っていたからだ。

ジャンの妻ルイーズはかつてペラスの村の小間物屋で働いており，17才だった彼女はやはり転任してきたばかりのジャンと恋におちたのだった。ルイーズはこの少々斜視がかった青年を愛し，ジャンもまた美しい膚，健康そうな歯並びを見せ，半眼に閉じるとおのずと微笑が浮ぶ優しい目をしたルイーズを愛した。[24] ルイーズはペラスの人間ではないこの青年ジャンと結婚することに躊躇はなかった。何故なら，ジャンは《インテリ》であり，

ペラスの人々が尊敬する《教師》，垢によごれない《白い手》をした前途有望な職にある青年だったからである。娘の結婚にルイーズの両親はもろ手をあげて讃成した。が，ジャンの両親は猛烈に反対する。[25] 百姓ふぜいの娘と結婚することはない，という理由からだ。[26] とまれ，ジャンとルイーズは結婚し1700フランの収入で幸福だった。2人の子供も生まれた。ポールとローズである。

夫からその転任を知らされたルイーズはペラスと両親の許から去るのは嫌だ，と言って泣く。[27] が，ジャンの説得に負けた彼女はマルヴァルへの出立をしぶしぶ承知する。一家はペラスからモンクラピエに列車で，そこから馬車でマルヴァルにたどりつく。秋雨をついての旅は惨めなものだった。[28]

新任地マルヴァルは山間の小村で葡萄畑がどこまでも続いていた。小学校は村役場の一部を教室としており，その屋の2階がジャン一家の住居である。ジャンは役場の仕事も兼任するがそれは予想に反してわずか500フランの収入であった。村長はラステル氏で自称革新派であった。[29]（反教権政策を支持するということ）。移転に併なう出費はジャン一家の財布を空にしていた。ジャンは村の店から付けでものを買う —《店主は明らかに驚きと軽蔑のまなざしを示して》ジャンに言う。《よろしいですよ，ムッシュー》—。[30] ルイーズは妊娠していた。彼女はよそ者をじっとみつめる村民のまなざしに苦しんでいた。更に，ペラスより出費のかさむマルヴァルの生活に，ルイーズは疲れ初めていた。そんな時当局に提出していた転居費用申請は却下された。[31] 彼らは《動いただけ》損をした。

年があけるとルイーズの伯母から20フラン送られてきた。新たに生まれた《双子》の洗礼式の費用だった。親戚一同をマルヴァルに招待する金がない。祝い事はごく内輪でやるしかなかった。[32] 2週間程して1通の手紙がとどく。それは未亡人となっていたジャンの母が盲になり衰弱しているという知らせだった。[33] かつてその結婚に反対したジャンの母コセット（本名はコス）が一家と同居する。嫁と姑の争いが始まる。[34] 貧困は目に見えてくる。ジャンは盲の母に資金援助を願い出る。母は拒絶する。以後，盲の母はジャンと，とりわけ嫁のルイーズが自分の持ってきた《トランク》の中

身をねらっていると考え彼らに気をゆるさなくなる。ルイーズは義母を《守銭奴!》とののしり，義母は嫁を《ドロボー女!》とののしる。ルイーズは病に倒れる。双子の誕生とルイーズの薬代はジャン一家の家計をしめ上げる。思いあまったジャンはふと見かけた新聞広告の長期金融のペテンにかかりあり金をはたいてしまう。[35] ジャンの質屋通いが始まる。[36]

地区の小学校教員による教育会議が開かれる。[37] ジャンは初めてそれに参加し，不意に指名され，発言を要求される。発言の論旨は一向にはっきりしない。急にジャンは叫ぶ。《私には4人の子供と盲の母，それに病気の妻があります。休むひまも，静かな勉学のひまもないまま黒人の様に働きづめです……恥ずかしくて死にそうです!1体私はどうしたらいいんでしょうか!……》[38] 発言は無視されたが，ジャンと同じ状況に生きる少数の教員達はこれに感動する。[39]

《片手に持った燭台の光で，彼は恐ろしい光景を目にした。その盲の女はベッドを離れ，しおれた乳房とやせほそった両脚をさらし，彼女のトランクの上にまるでそれを誰かの手から守るかのように両腕をひろげて長々とのびていたのだ。》[40] 盲の母は死んだ。トランクの中には252フランと少し入っているだけだった。[41] ジャンは罪の意識に苦しめられながらもその父母の土地を売却する。[42] つかの間の幸福がジャン一家におとずれた。

村長選挙が始まり，[43] ラステル氏はその不正のため失脚，クロゼル神父の仲介にもかかわらずジャンはラステル派に協力したかどで《保守派》に役場職をとりあげられた。[44] 副収入の途が消えた。ジャン一家の貧困は深まり，ジャンとルイーズの仲も冷却する。[45] このジャン一家の貧困と夫婦の不仲は村中に知れわたり，生徒はもはやジャンを尊敬せず，彼が生徒に体罰を加えたことから村民も彼を馬鹿にする。ジャンは疲れ果て，ダバコを買う金もなく貧困にとりまかれている……》

## (Ⅲ) シャルル・ペギーの《ジャン・コストについて——De Jean Coste——》[47]

ラヴェルニュの作品《J・C》についての論評は1901年及び翌年にかけ

て次々と現われる。《カイエ》に掲載されたものを除けば《ラ・プチット・レピュブリク》に7本（内5本はギュスターブ・テリーのもの），《ラ・フロンド》に3本である。ペギーは無論これらの論評を丹念に読みこんでゆく。[48] 論評の多くはラヴェルニュの作品に好意的で，一田舎教師の生活の一端を描いたこと，飾り気のない素直な語り口で貧困の生活を描いたこと等を評価し，一様に作品《J・C》を一種のドキュメントとして受けとったのである。[49] 更に，次く論評をたどれば，レオン・ブロワ，アルベール・チエリー，アルベール・ジャックらはともにこの作品中の底深い貧困に，またその弁証法的文脈からかもし出される悲惨さの中にゆるぎない作品価値を見出しているのである。[50] が，同時に当時フランスを支配していた政治理念，即ち《反教権主義》政策を問題に出来る要素を作品内に擁しながら何らそれに触れず，という批判があった。この批判の主は，小説《J・C》を最初に論評したギュスターブ・テリーである。ペギーはこの名《テリー》を忘れない。

ワルデック・ルソー内閣は共和制擁護をその旗印にかかげ，次くエミール・コンブ内閣は更にそれを押し進め，共和主義の敵たる教会勢力の一掃に力を入れた。聖職者は政治，教育に携わることを禁じられ，公立学校が増設され，尼僧の維持する女子初等学校，3000に及ぶ教区学校は閉鎖され，それは1904年のローマ教皇庁との外交関係断絶にまで発展し，翌年には教会財産の国家没収に至る《政教分離》がごりおしに進められていた。これに対して当初ペギーは無神論の立場をとりつつ無関心だったが，後には猛然とこの《反教権主義》に対立する。それはペギーのワルデック・ルソー内閣及びコンブ内閣に対する嫌悪感であり，《政治》が《民衆の宗教》に介入するその《政治介入》に対する反発であった。このときテリーはこの共和国擁護を目指すときの内閣の立場を支持する1人であった。だからテリーはその立場からして当然ペギーと暗に衝突していたのである。《テリー》の名はペギーの頭から離れない。[52] そんな折，《パージュ・リーブル》は《J・C》の抜粋を載せた。そしてラヴェルニュの作品《J・C》はペギーの《カイエ》から独立する。1902年の秋《J・C》はオランドルフ社から

単行本として出版される。総頁数314，価格3F50である。次いで11月4日《カイエ》第3集第4分冊にペギーは《ジャン・コストについて》を発表する。

《D・J・C》は1人の小学校教師マルグリット・ムニエがペギーに寄せた書簡の紹介に始まる。彼女は小学校の教員手当の低さをのべつつ，自分になにがしかの仕事，宛名書きとか原稿の清書等の手仕事をまわしてもらえまいか，とペギーに訴えている。[53] ペギーはここから自分の考えを展開させる。《我々は我々の愛する人々を悲惨から救い，その飢えから我々の友人達を救わねばならない。（……）我々は欠如と悲惨，頽廃と死に対決しなければならない[54]（……）人はほとんどいつも悲惨さを貧困と混同している。この混乱は悲惨が貧困と隣り合わせであることに起因する。確かにそれらは隣り合ってはいる。だが別のものだ。一方には境界があるのだ。[55]（……）（貧困は経済生活が）保証されるかされないか[56]（の問題であり貧乏か金持かの境界でしかない。だが）悲惨はそうした境界を超えてすべての領域に拡がるのだ。[57]》ここからペギーの特異な比較が始まる。《哀れな人間をその悲惨から引き出さねばならない，1人のこらず（sans aucune exception）[58]。神学的な比較をするのをお許し願いたい。即ち地獄は神による破門のいきつく先として性格ずけられている。地獄落ちを申し渡された者は神から破門された者である。彼は神によってキリスト教徒の共同体外に置かれる。彼は神の存在を奪われた。彼は神の不在にさらされる。（……）地獄は基本的に永遠なるものに姿を変える。この見方によれば地獄は一切の希望が剝奪されたものだ。地獄に落ちた者の地平は永遠の鉄柵で囲われている。[59]（……）煉獄は（……地獄と同様の）不在を含むことでよく知られている。（だが）最後の審判のとき，イエズスはその栄光もて煉獄にある最後の魂を解放し，捜しにやってくるだろう。[60]（……）地獄は共同体外に置かれている。だが煉獄は共同体の内にある。（……）煉獄は生に属している。だが地獄は死に属している。[61]（……）民衆が，生は地獄だ，と言うとき民衆はその言葉にその語の第1義をかけているのだ。（……）民衆が（……）

我々に地獄について語るとき，我々は神学における地獄のように経済における悲惨を正確に理解する。煉獄は貧困のある種の要素としか共通項をもたない。だが悲惨は地獄と完全に照応する。地獄は永遠なる死の永遠なる確実性である。だが悲惨はそのすべての領域において人間的死の完全なる確実性である。[62]》ペギー独得の，正確な語義と定義を目指しての求心的な文章とその息ずかいはここでも精彩を放つ。ペギーの生い立ちからしても，彼自身この《悲惨》は身にしみて熟知している。更に彼はカトリック教会が救済を唱えながら《地獄落ち》をちらつかせるその欺瞞と彼自身の絶えざる不安感を《ジャンヌ・ダルク》劇に描き出し，作中のジャンヌは口をきわめて《この世の悲惨》を神に告発し，その彼女は世俗の権力によって圧殺された。[63]ペギーもまた《カイエ》出版の経緯において神なき心の孤独な闘いの中で経済的にも精神的にも《悲惨》な状況にあった。しかもレンヌの法廷はドレフュスの無罪を宣言しえなかったし，にもかかわらずのし上ったドレフュス主義者達，なかんずくジョーレス，プレサンセ，ビュイソン，ギュイエンヌ，クレマンソー，らは政界に乗り出し（1902年）権力を握り無謀な反教権政策をもって人民の圧迫者になり果てていた。ペギーの悟るところ，己れは《敗者》であった。[64]《悲惨》の定義にペギーが固執する所以である。と同時にそれは《J・C》の主題の解説でもある。《J・C》中のジャンをとりまく状況はペギーの定義する《悲惨》の状況であり，単なる《貧困》ではありえない。ジャンには救いがない。ペギーはそこに自己との同一性を見たのではないか？[65]即ちジャンは村民からも，生徒からも，友人達からも，母からも，妻からも見捨てられ，ペギーは似非ドレフュス主義者達に，旧ベレ書店の仲間達に見捨てられたのである。[66]このとき1897年の《ジャンヌ・ダルク》は暗示に富む。即ちペギーは史実を忠実に踏まえつつも，描き出した彼のジャンヌ像は離反によりたった１人孤立した《乙女像》であったからだ。史実をたどれば必ずしもジャンヌは１人ぼっちではなかったはずである。[67]《悲惨》の定義は続く。《人間的な単純な悲惨は絶対的な重要性をもつ。地獄落ちはカトリック教徒達には絶対的な重要性をもつ。[68]（……）悲惨は生そのものである。それは例外なしの

隷属である。(……) それは生きながら死ぬことである。(……) もし追いつめられたジャン・コストがある日彼の妻や子位達と共に自殺するなら，彼のその最後の日は彼の最も恐ろしい日，Dies irae，怒りの日であろう。[69]»

«共和国の紋章ともいうべき言葉，自由，平等，友愛，があるがそれらは同一の平面に立っていない。(……) 誰それがこれこれの立場である式の不平等性は重要ではない。[70] 平等の問題は急を要するものではない。平等の感覚は特殊な革命意識しかよびおこさなかった。(……) それに反して友愛は人類の心を深く動かす。(……) 真に悲惨な者達は豊かさによる平等化を願いはしない。何故なら彼等はその平等化は新たな冒険なしには，あるいは危険に再び身を投じなければ成し遂げられないことを感じかつ知っているからだ。(……) 保守主義者は平等への情熱を失なっている。彼等はまったくもって革命家ではない。彼等は友愛の諸感情を非常にしばしば知らず，学ぼうともしない。[71] (……ペギーを含め) 悲惨の実態を知る者達は (……) 心底革命家である。[72] (……) 彼等は心底社会主義者である。彼等は平等主義者ではない。(……) 軍国主義者でもない。(……) 熱狂者でもない。(……) 経済の仕組の中で，悲惨に流れ出したような幸福は，彼等には真の幸福とは見えない。[73] (……ではどうするか？宗教は) 魂が地獄に落ちるか落ちないか，救われるか救われないか (……しか考えないが故に) ある人間が，ある人民が，ある世代が宗教的恐怖，宗教的畏怖 (……) から免れれば1息つくことが出来るのだ。[74] (……) だがそれも長続きはしまい。(……) カトリック教徒がとりわけ救いに執心するように，我々はとりわけ悲惨な者達から恐怖をとりのぞく努力をしなければならない。(……) 我々は多くの人民を悲惨から救うためにある種の行動をとらねばならない。[75]» それはつまるところ，友愛を基調にした連帯である。

このみずみずしいペギー若書きの文章は彼の理想主義を臆面もなくさらけだすことにおいて，後年の渋味の効いた内省的，告白的文章とは大違いである。そしてその多くの文意はまさにペギーとマルセル・ボードワンが夢見た理想都市《マルセル，調和ある都市に関する第1の対話》の線を変わることなく維持しているのである。[76] と同時に，ドレフュス事件に参与した

彼がこの線を守り通すことによって，ドレフュス派から追い落され，現政治路線においてアウトサイダーにならざるをえなかった事が理解出来る。加えてペギーがその個人的反カトリシズムを表明し，カトリシズムとは別の救いを《行動》によって示すと断言する時，それは先の《調和ある都市》中の理念，神なしの社会主義的ユートピアに忠実であっても，すでにしてラヴェルニュの作品《J・C》の内容からは離れ，それはペギー自身の（当時の）信条告白にすぎない。例えば，ラヴェルニュの《J・C》中，ジャンはクロゼル神父に親近感をもって接しているし，また作者は作中のだれにもましてこの神父に誠実で優しくかつ冷静な洞察眼を与えているからである。[77] だがこれこそがラヴェルニュの作品を当時の政争から隔てて独立させる稀な特色であると同時に，テリーが反発したものではなかったか？[78] そこでペギーは《J・C》の作品価値そのものを認めよ，とテリーに追る。そして《貧しいカイエ》に敵対して反教権主義者達を扇動しているテリーを非難する。[79]

《人は（作品《J・C》の内容が）暗すぎると言う》[80] とペギーは書く（強調は筆者）。《悲惨さを知らない者は個人の生活の中で安全なる要素と悲惨の諸要素は同一の秩序にあるものだと正々堂々と，また論理的に思い描く（……）》[81]。同じ暗さをその作品中に表現したゾラへの批判の伏線である。《人は度々ゾラによって描かれた様々な悲惨とジャン・コストのそれを比較する。（……）ゾラの描いた様々な悲惨の方がジャン・コストの悲惨よりもっと暗い。（……しかし）ゾラの描いた悲惨はしばしば丹念で勤勉な旅行者，悲惨の視察官，遊覧者の目によって眺められたものだ。[82]（……だがラヴェルニュの描いた）生は行動の様式，実験の様式のいずれにも依存しておらず，科学におんぶしていない。科学は生を明らかにしようが，（……）科学は生を作りえない。ジャン・コスト，その妻，その母，その子供達はみな生きている。（……）ジャン・コストとその悲惨は我々を追いかけ，我々につきまとう。それはどこにでもある恐怖なのだ。[83]（……ゾラの科学には）神秘がない[84]（強調な筆者）。》

ゾラがペギーにとって何であったかはドレフュス事件へのペギーの参加

の仕方をみれば説明するまでもない。[85] がここでペギーの《ルーゴン・マッカール》叢書の作家への批判を見る。これはペギーの《ゾラについて》[86] で更に拡大される。そしてペギー独得の《神秘観》が科学的，方法論的文学観に対置される。

次いでペギーは作品《J・C》の成功について述べ，オランドルフ版となって世に出る《J・C》について多少誇らし気に，《さし絵》などこの本にはいらない，とアドバイスしたことを洩らす。そうして出来上った本を，彼はシンプルで控え目で1冊の本に価する出来栄え，と語る。[88]（この本の復刻版から本稿の《J・C》の筋書は書かれた。）そして少々回想風に《カイエ》が作品《J・C》を掲載する折，作者ラヴェルニュは1銭も稿料を受けとらなかったばかりか，オランドルフ版への移行の際，その第1版の収入の半分を《カイエ》に寄附したことにペギーは深い感謝を捧げる。[89] そして《カイエ》掲載の折何分冊かに分けず1分冊に作品《J・C》を収めたことを説明しつつ，《ドンキホーテ》《ロビンソン・クルーソー》のように《ジャン・コスト》は普遍的な名前となる，と断言する。そこでペギーは《カイエ》の予約購読者に向かって《何がしかの抵抗があろうとも》その本（《J・C》のこと）を買ってほしい，と訴えるのである。[91]

## （Ⅳ） 結論にかえて

——ラヴェルニュとペギー——

ラヴェルニュは1903年念願のパリ，コルベール校の復習教師となった。[92] この時からラヴェルニュとペギーの交際が始まる。オランドルフ社からの《J・C》出版の翌年である。従ってペギーがラヴェルニュの原稿に接した1899年には，ペギーはラヴェルニュの人となりのすべてを知らなかったのである。ペギーは純粋に作品《J・C》に感動しそれを評価したのである。ではペギーは作品《J・C》の何に魅せられたのか？それはペギーの《D・J・C》で論じられるその《悲惨》さであろう。しかしペギーの論ずる《悲惨》さは作品《J・C》の悲惨とズレがある。ペギーのそれは作品《J・C》をかりて理論的に拡大したペギーの《悲惨》論であり，ラヴェルニュのそ

れは田舎教師の鬱屈した精神と経済の失遂を主義主張をこめずに描き出したごく自足的な小世界なのである。従ってペギーが《J・C》に対する持論を拡大すればする程逆にそれは作品《J・C》の本来の姿から遠去かるのである。ここにペギー特有の外面と内面の苛妙で悲劇的な面を見る。ペギーには対立する人間を切り刻むまで執拗に追及しつつ自説を曲げない戦闘的，理論的な面がある一方非政治的，非政争的人物，作品に心ひかれる面がある。ラヴェルニュの作品への傾倒，後のアラン・フルニエの人と作品への傾倒，そしてフルニエと共に傾倒したマルグリット・オドゥーの作品「マリー・クレール」がそれである。[93] 更にこの両極の面は，信仰回復後のペギーの作品群における詩の系列と散文系列とに分かれるだろう。つまりペギーは「グラン・モーヌ」「マリー・クレール」の系列に属す「J・C」に，それらの諸作品に共通するきわめて素朴で貧しい生活，それもフランスの片田舎に生きる人々のつつましい哀歓を感じそれらに深く感動したのである。従ってそこにはペギー論ずるところの《D・J・C》に見られる《悲惨》の形而上学はないのである。にもかかわらず様々な経緯を経て刊行した己れの《カイエ》でそれを論ずるとき，ペギーは戦闘的で理論的な外面をむき出しにせざるをえないのではなかったか？対立することによって己れの立場を公けにせざるをえなかったペギーの独得な1面である。だから彼は同論文中でドレフュス事件を語り，コンブ内閣を批判し，テリーに嚙み付き，反教権政策支持者を攻撃し，ゾラを引っぱり出すのである。だがこれらの論旨とその要素はいずれもラヴェルニュの作品《J・C》とは無縁のものであった。まさにペギーの《D・J・C》は，作品《J・C》を語りつつもそこに現われたものはといえばペギーの強烈な個性でしかなかったのだ。しかしまたそうした個性のいくばくかを作品《J・C》がもちえなかったところに作家ラヴェルニュの人と作品のその後がありはしなかっただろうか？

ラヴェルニュの人と作品はその後まったく忘れ去られた。[94] 徹底的に忘れ去られた。ちなみに筆者の手許にある何冊かの文学史，文学辞典，固有名詞辞典の類をめくってみても，もはやアントナン・ラヴェルニュの名は見つ

からない。ラヴェルニュの《ジャン・コスト》は《ロビンソン・クルーソー》にも《ドンキホーテ》にもなれなかったのである。そしてフランス全土にひろがるあまたの通り，その通り名にも彼の名はつけられなかった。[95] しかしペギーの個性は残った。

ラヴェルニュは忘れ去られペギーは残った。そのペギーは1914年9月5日に戦死し，10才年上のラヴェルニュは1941年3月6日に没した。ラヴェルニュはペギーの死後，その《強烈な個性》の主の記憶をこう記している。[96]

《私は自由の身になってからというもの，とりわけ毎木曜日の午後はいつもペギーが司会しリードしていた諸々の考え，言葉，討論がうずまくあの《店》で長い時間を過した。（……）そうした午後が終わると，いつもペギーは私の腕をとり1緒に外に出た。彼はメトロのオデオン駅まで私についてきて，通りがかりにダントン通りの角の売店で《ル・タン》紙を買うのだった。（……）ペギーと私は腕と腕とを組んでクリュニー小公園の鉄柵のあたりをぶらぶらしたものだ。彼は（……）その希望や悲しみや喜びを（……）私に語るのが好きだった。（……）ペギーの死は私には恐ろしいショックだった。その時から，私の身体の1部分が彼と共に消え，私の生命はもはや以前と同じ味わいと目標を失なったように私には思われる。　30　9bre (Novembre) 1921 》

**註**

※　略号について

プレイヤード版

Oeuvres en Prose (1898-1908) ; Pl. A

Oeuvres en Prose (1909-1914) ; Pl. B

Oeuvres Poétiques Complètes ;　Pl. C

※　本稿の参考文献中最も重要なものはアンヌ・ロシュがアントナン・ラヴェルニュの作品《ジャン・コスト》を復刻し（オランドルフ版），シャルル・ペギー作品《ジャン・コストについて》を，オルレアンに保管されているペギーの手稿をもとに原文の訂正部，加筆部その他の移動を刻明に註で示しつつ全文を紹介し，さらにラヴェルニュとペギーの関わりについて詳細な研究ノートを付し

た書，《Charles Péguy, De Jean Coste, édition critique par Anne Roche avec le roman d' Antonin Lavergne, Jean Coste》éd, Klincksiek (Coll, texte du XXe siècle) である。同書は (A, R) と略す。

※ ペギーの作品《ジャン・コストについて》(De Jean Coste) はプレイヤード版 Pl, A: P. 487-P. 536 に収められており，編註者はマルセル・ペギーである．本論文ではアンヌ・ロシュの《ジャン・コストについて》の頁数はP. ——(A. R) と示し，同じくプレイヤード版のそれはP. ——(Pl, A) と示す。

(1) Pézenas は小説《ジャン・コスト》の舞台ペラス《Peyras》になる．

(2) C. A. P. E. N 及び C. A. E. S. S である．

(3) オランドルフ版《ジャン・コスト》の末尾——p. 314 (A. R) に《1894年10月より1895年6月，エヴルーにて》とある。

(4) ローデへの転任はラヴルニュに大きな精神的ショックを与えた。彼はパリに近ずき，パリで職を得たかった。p. XXVII (A. R) 参照。転任による期待感とその挫折感は作品《ジャン・コスト》によく出ている。

(5) ラヴェルニュはこの時すでに書きあげていた作品《Monsieur le Maire》の出版（または雑誌掲載）にまつわる手痛い拒絶を経験している。詳細は p. XXX—II (A. R) 参照。結局この作品は1905年オランドルフ社より上梓された。作品《ジャン・コスト》は1895年に脱稿，作者は '96年サヴィヌ書店に原稿を送附，拒絶され，作者の友人フレデリク・バタイユはポール・ドュポン社にその原稿を送附，同社拒絶。アンリ・ベランジュはこの小説に感動《la Revue Hebdomadaire》に掲載の約束をするが実現されなかった（'98年8月)。

(6) 送附の理由は作者が1899年1月以来雑誌を通じてペギーの名とベレ書店の名を知っていたからである。

(7) この作品の成立過程については拙稿「シャルル・ペギーの《ジャンヌ・ダルク》；「芸文研究」No. 42, 1981, p. 282-p. 274 参照。

(8) 《Notes politiques et sociales》Charles Péguy. André Boisserie 編, Cahiers de l'Amitié Charles Péguy, 1957 に所収。なお同書は《もう1つのドレフュス事件》(社会主義への洞察) 大野一道氏訳，新評編1981, として邦訳されている。

(9) Ibid, André Boisserie, Avant-Propos, p, 7-p. 33 参照

(10) ピエール・ミケル (渡辺一民氏訳)《ドレーフュス事件》白水社p. 104参照。

(11) Premier Congrès général des organisations socialistes françaises.

(12) ペギーはオルレアン社会主義研究グループの代表であった。

(13) pl. A《Pour moi》: p. 1273

(14) Ibid, André Boisserie, p. 46-p. 92

同上訳書：《危機と社会主義政党》,《社会主義政党の危機とドレフュス事件》他，p. 59-p. 163 参照。

(15) 《Lettre du provincial》: Pl. A p. 89-p. 101 に所収。

(16) pl. A P. 1274

(17) 《Péguy》 Daniel Halévy, éd, Grasset 1979 p. 149—p. 150(旧版p. 89-p. 90)

(18) p. 464-p. 465 (A・R) (なお「回想記」とはタロー兄弟の求めに応じて書かれたメモ程度のもの)

(19) 《ドレーフュス事件》渡辺一民氏著，筑摩書房，1972, p. 223

(20) 現在この《La préface de l' éditeur》はプレイヤード版には未収。p. XV-p. XVI (A・R)

(21) 原題は《Jean Coste ou l' ínstituteur de village》以下《J・C》と略す。

(22) p. 3 (A・R)

(23) p. 6-p. 7 (A・R)

(24) p. 14 (A・R)

(25) p. 16 (A・R)

(26) p. 17-p. 18 (A・R)

(27) p. 24-p. 27 (A・R)

(28) p. 32-p. 36 (A・R)

(29) p. 46 (A・R)

(30) p. 58-p. 59 (A・R)

(31) p. 71-p. 72 (A・R)

(32) p. 75-p. 79 (A・R)

(33) p. 80 (A・R)

(34) p. 82 より (A・R)

(35) p. 120-p. 125 (A・R)

(36) p. 128 より (A・R)

(37) p. 134, XIII章

(38) p. 159 (A・R)

(39) p. 160-p. 179 (A・R)

(40) p. 198 (A・R)

(41) p. 210 (A・R)

(42) p. 220 (A・R)

(43) p. 227 より (A・R)

(44) p. 272-p. 273 (A・R)

(45) p. 284 (A・R)

(46) p. 314 (A・R)

(47) 以後《D・J・C》と略す。

(48) 《L' édition de Jean Coste》 p. XXXIII-p. XXXIX (A・R)

(49) 多くの批評家達はジャン・コストを作者アントナン・ラヴェルニュと混同した。しかしラヴェルニュには4人の子達がいたわけでもないし，盲目の母親がいたわけでもなく，その妻は教養深い知的な婦人であった。(後にこの婦人が盲目になったことは奇妙な感じがする。p. XXVI (A・R) 参照) またこの小説の題材の多くはカーンでのラヴェルニュ自身の見聞の集大成と推定される。(p. XXXII-p. XXXIII (A・R) 参照)

(50) p. LXXVIII (A・R)

(51) 《L' Affaire Téry》 p. LXIX-p. LXXIX (A・R) 参照
なお彼は《ラ・プチット・レピュブリク》を代表するジャーナリスト。

(52) ペギーがテリーに言及した論文 (作品) は数あるが，最も激しい調子で書かれたものが《カイエ》第7集第3分冊に発表された論文 (1902年) で概要は p. 1456-p. 1469 (pl. A) 参照。

(53) p. 327-p. 328 (A・R)　　p. 487-p. 488 (pl. A)

(54) p. 329 (A・R)　　p. 489 (pl. A)

(55) p. 336 (A・R)　　p. 494 (pl. A)

(56) 同 (A・R)　　同 (pl. A)

(57) p. 337 (A・R)　　p. 495 (pl. A)

(58) この言葉は同論文中の随所にみられるもの。同論文中の1つのキーワードである。更にこの言葉は他の文章からはなして1句のみ独立，と指示された (オルフアン草稿，p. 353 (A・R) 脚註) もの
《Uu seul être vous manque, et tout est dépeuplé》に導かれる。私見によれば，この句は奇妙に次の句に対応するように見われる。《A votre avis, si un homme possède cent brebis et qu' une d' elles vienne à s' égarer, ne va-t-il pas laisser les quatre-vingt-dix-neuf autres sur les montagnes pour s'en aller à la recherche de l'égarée? 以下，マテオ: 18-12, 13 (仏文はエルサレム版「聖書」による。) 即ちペギーの胸中にある被除外者的意識は逆にキリスト教にあっては救いに至る意識としてあるのであり，当時の信仰を失なったペギーの思想が時としてキリスト教 (カトリック) を批判しながらも奇妙にキリスト教的色彩を帯びるのは，後の信仰回復に至るペギーの道程を予感させて興味深い。

(59) p. 359 (A・R)　　p. 497 (pl. A)

(60) p. 340 (A・R)　　p. 498 (pl・A)

(61) p. 340-p. 341 (A・R)　　p. 498 (pl・A)

(62) p. 341 (A・R)　　p. 499 (pl・A)

以上の引用において(……)は原文の文章省略 (訳出に際しての) を示し( )内の加筆は文脈をたどる上での筆者による加筆・以下同様。

(63) 《悲惨》《地獄落ち》《ジャンヌ・ダルク》に関しては拙稿《芸文研究》No. 42, 1981, p. 282-p. 274 参照。

(64) この意識は後の大作《我らの青春》に著しい。p. 528, p. 535, p.550 (pl・B) 参照。

(65) ロマン・ロランはその著《ペギ》の中でこう述べている。
ここではっきり言っておかねばならないが，このような一致は，ペギーにあっては，その反面として，きわめて痛ましい激越な怨恨，すなわち，富者に対する憎悪をもっていた。それはけっして，彼らにたいする福音主義的非難にとどまらない。この憎悪は，容赦ない社会闘争の荒々しい性格を帯びていた。それは彼にとって，ひとつの固定点であった……(……)この憎悪は，ペギーが彼の最初の「カイエ」とともに，日々のパンのための激烈な戦いと明日の不確実とを苦々しい思いで経験した数年間，パリで，悲惨さと社会的権利要求とにじかに接触することによってめざめたのである。彼が1901年に出版したアントナン・ラヴェルニュのてがたい物語，「ジャン・コスト，あるいは村の先生」をあんなに法外に重要視したのはこのためである。(……)富者たちにたいするペギーの怨恨は年を経るにつれて強まるばかりだった。それはすさまじい逆上にまでいたるであろう。やがてペギーは，新しいキリスト教徒として，その激しい怒りを神のものとするであろう。》(山崎庸一郎氏他訳，みすず書房，ロマン・ロラン全集No. 16より。p. 562-p. 563)

(66) 《Charles Péguy》Henri Guillemin, éd, Seuil, 1981 刊の《Péguy rompt avec le groupe Herr》(p. 105-p. 146 参照。)

(67) 註 (63) に同じ。

(68) p. 342 (A・R) p. 499 (pl・A)

(69) p. 348 (A・R) p. 504 (pl・A)

(70) p. 356 (A・R) p. 510 (pl・A)

(71) p. 359 (A・R) p. 512 (pl・A)

(72) p. 361 (A・R) p. 514 (pl・A)

(73) p. 362 (A・R) p. 515 (pl・A)

(74) p. 344 (A・R) p. 500 (pl・A)

(75) p. 355 (A・R) p. 509 (pl・A)

(76) マルセル・ボードワンと「調和ある都市」については拙稿 (前掲) p. 282-p. 280 参照。

(77) クロゼル神父は作品中，主義主張に流れて本来の姿を失なった世の中を批判し (p. 237) その聖職者としての誠実な意見 (p. 238) はジャンの心の救いとなるべく描かれている。また，この神父との接近がジャンのラステル氏の選挙への加担の伏線となるところは，反教権主義的政策が施行されていた当時の世相を反映するものであろう。だがそれ故にクロゼル神父像は作品中き

わめて主義主張から遠い存在に映るのである。

(78) 《J・C》が反教権的主義，主張をもっていないことが欠点であるとはペギーもまた認めているのである。p. 378 (A・R) p. 528 (pl・A) 参照。しかし同時に《J・C》が政治から離れている点をペギーは評価するのである。
p. 379 (A・R) p. 529 (pl・A)

(79) p. 334 (A・R) p. 492-p. 493 (pl・A)
p. 381 (A・R) p. 531 (pl・A)

(80) p. 365 (A・R) p. 518 (pl・A)

(81) p. 363 (A・R) p. 516 (pl・A)

(82) p. 367 (A・R) p. 519-p. 520 (pl・A)

(84) p. 369 (A・R) p. 521 (pl・A)

(85) ペギーは《J' accuse》の主ゾラの許を1898年2月に訪問している。

(86) (pl・A) p. 537-p. 560 所収《De ZOLA》
《カイエ》第5集第4分冊，1902年12月4日号

(87) p. 374 (A・R) P. 525 (pl・A)

(88) p. 375 (A・R) p. 526 (pl・A)

(89) p. 376 (A・R) p. 527 (pl・A)

(90) p. 366-p. 377 (A・R) p. 519 (pl・A)

(91) p. 377 (A・R) p. 527 (pl・A)
なお以上の作品要旨は多岐にわたる同論文の内容を，本稿の要旨にそって，筆者が抜粋したものであり，文脈は原本に忠実ではない。またこれ以後ペギーの《De Jean Coste》を《D・J・C》と略す。

(92) 1918年まで彼は復習教師であり続け，同年教職を辞した。この間，作品《Monsieur le Maire》《Tantourne》がオランドルフ社より単行本として出版され，同時に彼は演劇作品の脚色をしたりするがさしたる名誉も得なかったようである。

(93) 《Péguy et Alain-fournier, évocation d' une amitié》 Auguste Martin, éd, C, A. C. P. 1954, 及び《Alain-fournier Charles Péguy Correspondance 1910-1914》 par Yves Rey-Herme, éd, Fayard 1973 刊の p. 8-p. 10, p. 28-p. 34はペギー，フルニエ，オドゥーの関係を知る上で興味深い資料であると筆者は考える。

(94) 《その後》とは正確にはラヴェルニュの死後である。なお，ラヴェルニュが没した時，その死を報じた新聞は1地方紙《レクレール》だけだった。p. XXV (A. R)

(95) p, XXIX (A. R)

(96) 註 (18) に同じ

(97) p. 465-p. 469 (A, R)